黒潮ラインをゆく ～その1～

南国市の四季には、海岸線から山岳地帯まで、いろんな風景との出会いがあります。

今月からの四部、黒潮ライン沿いを西から東へと、出会いを求めて探訪します。

鐘乳石の洞窟がある石土神社

石土池の南西の角に大きないちょうの木があり、その下に大岩を背にした石土神社がある。岩の下には蛇穴と呼ばれる洞窟があり、鐘乳石や石筍が見えている。入口近くで少しもぐってみると、すぐにヒンヤリとした空気が漂ってくる。

神社の氏子の方に「この入口の木にひもをしばり、そのひもをつたって、中へ入ってみなさいや」と言われ、入ってみることにした。さらに氏子の方に「酸素がなくなったらこわいき、ろうそくに灯をつけて必ず持っていきなさい。灯が消えたら、引き返してこないかん。奥まで行き着いた者は誰もおらんけんど…」と言われて、少し不安になる。

この神社の言い伝えによると、昔、峰寺に名犬がいて、「八葉山手飼」という木札を、首輪につけてあった。ある時この犬が、兎を追いだした。逃げ場を失った兎は、とうとうこの洞窟に入り、七日の後、伊予の吉田の石灰洞で、二匹が死体となって横たわっていたという、洞窟の深さを物語るエピソードである。

石土神社では七月に大護摩供養祈願祭が催される。勇壮な火渡りの儀式は有名で、家内安全や五穀豊じょうを祈願して行われ、各地から大勢の信者や参拝客でにぎわう。

バードランド石土池

石土池は南国市でいちばん広い池であるが、十市パークタウン造成前は、現在の三分の一ほどの広さであった。今、ハスの花が美しく咲いているが、この部分はほとんどが田であった。周囲は入りくんでいて、怪獣のような形をしていたと地元の人は言う。今ではみられないが、四万十川にいるような手長エビやうなぎ、それにボラやちちこうなどが生息していた。

パークタウンの誕生により、防災調整池の役割を果たすことになり、面積が広がったため、冬になると多数のカモが飛来するようになった。種類も多く、今ではバードウォッチングのメッカとなっている。

三十一番札所禅師峰寺

禅師峰寺は、真言宗豊山派の寺院で、平城天皇大同二年（八百七年）空海によって開基されたと伝えられており、本尊の十一面観音は、大師自らの作であると言われる。

また、寺宝である、金剛力士像二体の木像は、鎌倉時代の力強い彫像を代表する名工定明の作で重要文化財にも指定されている。

この寺院は、海岸に屹立する峰山の景勝地にあって、境内には、露出した石灰岩が風化し、奇岩奇石が連なり天竺の補陀落山に似ているとも言われ、荘厳な霊場の容相を呈している。峰続きの月見崎とともに眺望が優れており、海岸に連なるビニールハウスの白壁の帯と紺碧の太平洋とのコントラストも面白く、建設中の高知新港が指呼の間に見えるし、その向こうに浦戸大橋が浮ぶ桂浜方面の遠景も美しい。

一方、眼を東に転ずると、琴平山のはるか彼方をジェット機が大空に向かって、矢のように急上昇していく。その下には、我が南国市の穀倉地帯が広がっていて、訪れる人々の眼に四季折々の美しい色調を披露してくれるし、天気の良い日は、はるかに室戸岬も眺望できるそうである。線香の香りのたちこめる境内を、吹き抜けていく海風もまた一段と快い。

亀蔵やまももの原木を発見

やまもも（楊梅）は県の花。また、市の木にも指定されている。そのやまもも中でも特に美味と言われる亀蔵やまももの原木が十市人形谷にあるというので、民生委員の島田平さんに道案内していただいた。

以前、雑木がビニールハウスの燃料として使われていたころは、山も手入れがされ、原木以外にも、たくさんやまももの木があった。時代が移り、燃料として使われなくなると人が山に入ることもなくなり、次第に竹やぶになってしまったとのこと。

市道から草道、竹やぶの中をかいくぐり、約二百㍍。やっとたどり着く。樹齢二百年を超えるというので、大木を想像していたが、竹やぶの中にあるためか、今にも枯れるのではないかと思われる古木だ。

立カンバンは出ているが、道が整備されてないので、一人で行ってこの木を見つけるのはまず困難。

現在、東京在住の山の所有者にかわり、島田平さんが可かと原木のお世話をされているが、県や市に原木周辺をやまももの森公園として整備・保護できないものかと思った。

これから秋のハイキングで訪ねてみようかと思われる方は島田平さん（☎㊗2397）まで連絡のうえ、おいでくださいとのことです。

このコーナーは毎月広報委員が皆さまのもとへ取材におじゃましていますので、ご協力お願いします。